

新耳鼻咽喉科学

切替一郎

新耳鼻咽喉科学

第一版

新耳鼻咽喉科学

自治医科大学教授
東京大学名誉教授

切替一郎



南山堂

新耳鼻咽喉科学

¥ 13,000

1967年11月1日 第1版発行 検印省略
1974年4月10日 第6版発行
1977年10月20日 4刷発行
1979年1月10日 5刷発行

著 者 きり かわ いち ろう
切 替 一 郎

発 行 者 鈴 木 正 二

発 行 所 株式 南 山 堂
会社

貼紙・捺印による価格
の変更はいたしません

113-91 東京都文京区湯島4丁目1-11
電話(03)811-7241 振替東京 1-6338

Printed in Japan © 1974 印刷 合資会社 真 興 社
3047-370265-5627

本書の内容の一部、あるいは全部を無断で（複写機
などいかなる方法によっても）複写複製することは
法律で認められた場合を除き、著者および出版社
の権利の侵害となりますので、ご注意ください。

序

本書が出版されて以来 幸に好評を以ってむかえられて すでに5年を経過したので、ここにその後の進歩をとりいれて再編し、改訂版を出すことになった。

初版の序に述べたように、本書はもともと医学部学生の教科書の目的で、耳鼻咽喉科学の骨子と思われる事項について、簡潔を旨とし、しかも出来るだけ分りやすく記述したつもりである。しかし重要な疾患については比較的詳細に記した。

耳鼻咽喉科学の真髄にふれ、その面白さを少しでもよく理解してもらうためには、どのように書いたらよいかを 常に念頭において筆をすすめた。

この学問の面白さを味わおうとするためには、まわりくどいようでも解剖や生理ないし一般症状など臨床の基盤となっている基礎的なことについて、地道に理解を深めるよう努力することが必要である。そのようにしてはじめて、個々の疾患への理解も深まり、興味も湧いてくるものと思う。諸外国の臨床医学教育において、実地臨床、ベッドサイドティーチングを重視していることはいうまでもないが、その中で関連のある基礎科学の教育が近頃重視される傾向にあることは、この事実を物語るものであって、このようにしてこそ疾患に対処して why and how を思考する素地を鍛錬することができるからであろう。本書において、基礎的、総論的な事項の解説に比較的多くの紙面が割かれているのはそのためである。

現在のところ耳鼻咽喉科学を根幹として、そこから分科した オージオロジー、神経耳科学、形成外科学、気管食道科学、音声言語科学、上顎顔面外科学、頭頸部腫瘍外科学 などがそれぞれ発展の道をたどっているが、それら進歩の重要なものは改訂版にもとり入れるべく努力した。

新しく加えた項目には、まず 耳、鼻、咽頭、喉頭、気管 および 食道の発生と発達異常に関する記述があるが、これは今回増補した外・中・内耳や顔面の奇形、頸部の先天異常である瘻孔、嚢胞などの諸疾患の生い立ちを理解することができて、その治療を考える上に役立つと思う。

電子顕微鏡の応用によって、内耳をはじめ嗅覚、味覚 など感覚器の微細構造が明らかにされたのに伴って、それらの生理機能も一段と細かく解明され、また生化学の導入により内耳代謝と聴覚との関係も明らかになりつつあることを増補した。他方、臨床的にも味覚、嗅覚作用への関心が高まって、その障害を検知する方法も徐々に開発されている。

神経生理学の進歩とわが科への導入と相まって、聴覚中枢機構が明らかにされるにつれて、従来余り手のつけられなかった後迷路障害の検索も行なわれるようになった。また 前庭平衡系に関する概念は拡大されて神経耳科学の発達をうながし、臨床的の成果と相まってこの方面の研究

は注目されている。これらの項目についても筆を加えた。

外傷に関する知識の必要性は増しているので、頭部、顔面および頸部外傷の記述を拡大するとともに頭頸部外傷後遺症を追加した。

そのほか、滲出性中耳炎、顔面神経麻痺、メニエール病、幼小児難聴、鼻アレルギーなどの項目も内容を新しくし、また 悪性腫瘍に対する化学療法の導入や手術、放射線療法の変貌についても言及した。時代の趨勢にしたがって、独立させたものに唾液腺疾患と、頸部リンパ節疾患をふくむ頸部腫瘍の二つの章がある。

なお 内容を理解しやすくするため 図を多く挿入し、自己の原図を使うことにも努めたのであるが、今回の改訂にあたっては とくにその後進歩した写真術やファイバースコープによって得られる病像の実態写真で交換しうるものはとりかえ、一部にカラー写真の頁（鼓膜像、口腔、咽頭 および 気管食道疾患）を新設したので前版に比べて 96 図の増加となった。これによって少しでも多く疾病についての実感を得ていただければ幸である。

本書の改訂にあたっては、京都の 山下憲治博士より 本書の全篇にわたり、内容についてご批判とご訂正をいただいたほか、ラテン語について緻密なご注意をいただいた。また、長沢 潤講師（東大第三内科）、蜂谷順一講師（東大放射線科）、鳥山寧二博士（武蔵野日赤病院）、佐藤恒正博士（東京警察病院）、福田 修助教授（東大形成外科）、鳥山 稔博士（関東労災病院）、小松崎 篤博士（虎の門病院）、蔵内祥博博士（東京船員病院）、北里大学および帝京大学の諸氏より多くの貴重な資料を提供していただいた。もちろん、内・外学者の優れた図表も多数引用させていただいた。

改訂項目や問題点の設定については 佐藤靖雄教授、野村恭也助教授、小林武夫講師、森田 守講師、井上鉄三講師、飯沼寿孝講師（以上 東京大学）、岡本途也教授（昭和大学）、設楽哲也教授（北里大学）、鈴木淳一教授（帝京大学）、広瀬 肇助教授（東大音声言語医学研究施設）の諸氏より相談相手として重要な意見と教示をいただいた。

これらの方々のご好意とご協力に対して心から感謝の意を表わしたい。

なお 著者の気づかざる誤まちや不備な点があると思われるので、読者諸賢のご指摘により、よりよいものに改訂してゆきたいと念願している。

本書は 南山堂 鈴木正二社長 および 河田孫一郎氏の尽力なしには世に出なかったと思う。写真は 田中耕象氏、挿図は 山本庸夫画伯に負うところが甚だ大きい。出版に当っては 南山堂出版部の 吉沢 公氏をはじめ各位にお世話になった。ここに記して深甚の謝意を表する。

1974 年 1 月

切 替 一 郎

目 次

耳 科 学

総 論

第 1 章 耳の発生と異常 1

1. 内耳の発生 1
2. 外耳の発生 3
 - 1) 外耳道 3
 - 2) 耳 介 3
3. 中耳の発生 4
 - 1) 耳小骨 5
 - 2) 鼓 膜 5

第 2 章 耳の解剖 6

1. 外 耳 6
 - 1) 耳 介 6
 - 2) 外耳道 6
2. 中 耳 7
 - 1) 耳 管 8
 - 2) 鼓 膜 8
 - 3) 鼓 室 9
 - 4) 乳様突起(乳突洞 および 乳突蜂巣) . . . 13
3. 内耳(迷路) 16
 - 1) 蝸 牛 16
 - 2) 前 庭 21
 - 3) 三半規管 23
 - 4) 内耳の血管 23
 - 5) 内耳の神経 および 中枢経路 24

第 3 章 耳の生理 27

1. 聴覚生理 27
 - 1) 耳 介 27
 - 2) 外耳道 27
 - 3) 中 耳 28
 - 4) 中耳伝音器の臨床病態生理 29
 - 5) 内 耳の振動 31

- 6) 蝸牛の電気現象 32
- 7) 内耳液 33
- 8) 聴覚中枢路 および 聴皮質中枢 . . . 34
2. 身体平衡の生理 37
 - 1) 深部知覚運動系の機能 38
 - 2) 視運動系の機能 40
 - 3) 前庭系の機能 41
 - 4) 小脳の機能 46
 - 5) 脳幹 および 基底核と運動機能 . . . 46

第 4 章 耳疾患の一般症状と病歴 . . . 46

I. 一般症状 46

1. 耳 漏 46
2. 耳 痛 47
3. 頭 痛 47
4. 耳周囲腫脹 48
5. 発 熱 48
6. 難 聴 49
 - 1) 伝音性難聴 49
 - 2) 感音性難聴 49
 - 3) 混合性難聴 50
7. めまい, 眩暈 50
8. みみなり, 耳鳴 52
 - 1) 非振動性耳鳴 52
 - 2) 振動性耳鳴 52
9. 神経麻痺 および 神経痛 53

II. 耳疾患と全身との関係 53

1. 脳疾患 53
2. 循環器疾患 54
3. 呼吸器疾患 54
4. 物質代謝障害 54

5. 先天性 および 遺伝性疾患	54
6. 急性感染症	54
7. 慢性特異性炎症	54
8. 中 毒	55
9. その他	55

III. 病歴について	55
-------------	----

第 5 章 耳の検査法 56

1. 視診 および 触診	56
2. 耳鏡検査法	56
3. 鼓膜の耳鏡像	58
1) 鼓膜の正常所見	58
2) 鼓膜の病的像	59
4. 耳管通気検査法	62
1) Valsalva 法	62
2) Politzer 法	62
3) カテーテル通気法	62
5. 耳の機能検査法	63
1) 聴覚機能(聴力)検査法	63

a) 音叉による検査法	64
b) オージオメータによる検査法	65
c) 自記オージオメータによる 聴力測定の原理と応用	67
d) 言語による検査	70
e) 方向聴覚検査	71
f) 幼児聴力検査	71
g) 難聴の診断	74
h) 詐 病	79

2) 平衡機能検査	79
a) 自発眼振ならびに誘発眼振の検査	80
b) 四肢平衡機能検査	89
c) 三平衡系の鑑別検査	90
6. 耳の X 線検査法	98
1) Sonnenkalb 法	98
2) Schüller 法	100
3) Stenvers 法	100
4) 断層撮影法	100
5) 立体撮影法, 拡大撮影法	102

各 論

第 1 章 外耳疾患 103

1. 耳介疾患	103
1) 奇 形	103
2) 耳血腫	103
3) 耳介軟骨膜炎	103
4) 耳帯状疱疹(ヘルペス)	106
2. 外耳道疾患	107
1) 外耳道閉鎖症	107
2) 耳垢栓塞	107
3) 外耳道異物	107
4) 急性限局性外耳道炎(耳癢)	107
5) 外耳道湿疹	108
6) 外耳道真菌症	108
7) 外耳の腫瘍	109
3. 鼓膜疾患	110
1) 鼓膜損傷	110
2) 鼓膜炎	111

第 2 章 中耳疾患 111

1. 中耳奇形	111
---------	-----

2. 中耳の損傷(耳小骨連鎖障害)	111
3. 急性耳管炎 および 滲出性中耳炎 (中耳カタル)ならびに耳管狭窄症	112
4. 慢性滲出性中耳炎(中耳カタル)	114
5. 急性中耳炎	117
〔付〕 特殊な経過をとる中耳炎	121
6. 慢性化膿性中耳炎	122
7. 急性乳様突起炎	132
8. 錐体尖端化膿症, 錐体尖端炎	136
9. 耳硬化症	138
〔付〕 van der Hoeve 症候群	141
10. 中耳傍神経節腫, 頸静脈叢腫瘍	142
11. 中耳の悪性腫瘍	143
12. 中耳の手術	145
1) 乳様突起単削開術	145
2) 中耳根治手術(中耳根本手術)	145
3) 保存的根治手術	148
4) 鼓室成形術	148
13. 頭蓋内合併症	152
1) 硬膜外膿瘍(外硬膜炎)	153

- 2) 硬膜静脈洞炎 および 血栓 154
- 3) 化膿性髄膜炎 155
- 4) 脳膿瘍 156
- 14. 顔面神経麻痺 157

第 3 章 内耳疾患 163

- 1. 内耳炎 163
 - 1) 急性び慢性化膿性内耳炎 165
 - 2) 漿液性内耳炎 165
 - 3) 限局性内耳炎 165
 - 4) 髄膜炎性内耳炎 166
 - 5) 内耳梅毒 167
- 2. メニエール病 167
 - 〔付 1〕 レルモワイエ症候群 174
 - 〔付 2〕 頭位眩暈症 174
- 3. ウイルスによる内耳疾患 175
- 4. 薬剤中毒による内耳障害 177
- 5. ストレプトマイシンによる内耳障害
. 177
 - 〔付〕 カナマイシン難聴 180
- 6. 全身疾患と内耳 180
- 7. 老人性難聴 180
 - 〔付〕 老人のめまい 183

- 8. 頭部外傷による聴器障害 183
 - 〔付 1〕 頭部外傷後遺症 186
 - 〔付 2〕 狭義の頭部外傷後遺症 186
- 9. 音響外傷性難聴 および 騒音性難聴
(職業性難聴) 187
- 10. 幼・小児の難聴 188
- 11. 補聴器 192

第 4 章 後迷路性あるいは中枢性疾患 195

- 1. 前庭神経炎 195
- 2. 椎骨脳底動脈疾患 195
 - 1) 椎骨動脈圧迫による間歇性循環不全 196
 - 2) 椎骨脳底動脈硬化症による慢性循環
不全 196
 - 〔付 1〕 頸腕症候群 196
 - 〔付 2〕 外傷性頸部症候群(鞭打ち損
傷) 197
- 3. ワレンベルグ症候群(後下小脳動脈
血栓症) 198
- 4. 聴神経腫瘍 198
- 5. 脳幹部障害による難聴 201
- 6. 皮質障害による難聴 202

鼻 科 学

総 論

第 1 章 顔面 および 鼻の発生と異常 . 203

- 1. 顔面, 鼻腔, 口腔の発生 203
- 2. 鼻甲介の発生 204
- 3. 副鼻腔の発生 205
- 4. 顔面, 顎の発生異常 205

第 2 章 鼻の解剖 205

- 1. 外 鼻 205
- 2. 鼻 腔 207
 - 1) 鼻前庭 207
 - 2) 骨鼻腔 207
- 3. 副鼻腔 210
 - 1) 前副鼻腔群 212
 - a) 前頭洞 212
 - b) 前篩骨洞 212
 - c) 上顎洞 212

- 2) 後副鼻腔群 214
 - a) 後篩骨洞 214
 - b) 蝶形骨洞 214
- 4. 鼻腔, 副鼻腔の血管 214
- 5. 鼻腔, 副鼻腔の神経 216
- 6. 鼻腔, 副鼻腔のリンパ管 218
- 7. 鼻腔, 副鼻腔の組織 218
 - 1) 鼻前庭 218
 - 2) 呼吸部 218
 - 3) 嗅 部 220
 - 4) 副鼻腔粘膜 221

第 3 章 鼻の生理 222

- 1. 鼻腔の生理 222
 - 1) 嗅覚作用 222

2) 呼吸道としての鼻腔	224
3) 共鳴作用	226
2. 副鼻腔の生理的意義	226
第4章 鼻疾患の一般症状 および	
全身との関係	226
I. 鼻疾患の一般症状	226
1. 鼻閉塞	226
2. 鼻漏	227
3. 鼻乾燥 および 痂皮形成	228
4. くしゃみ(嚏)	228
5. 嗅覚障害	228
1) 嗅覚脱失 および 嗅覚減退	228
2) 嗅覚過敏	229
3) 錯嗅, 嗅覚倒錯	229
4) 嗅盲	230
6. 音声障害	230
1) 閉(あるいは 閉塞性)鼻声 または 鼻音症	230
2) 開(あるいは 開放性)鼻声 または 鼻音症	230
7. 眼症状	230
II. 鼻疾患と全身との関係	230
1. 副鼻腔炎と病巣感染	231
2. 慢性気管支炎	231
3. 消化器, 腎臓 などの障害	232
4. 精神機能	232
第5章 鼻の検査法	232
1. 外鼻検査	232
2. 鼻腔検査	232
1) 鼻鏡検査法	232
2) 消息子検査法	235

3) 内視鏡検査法	235
4) 生理機能検査法	235
a) 鼻腔通気度検査法	235
b) 嗅覚検査法	236
3. 副鼻腔検査	237
1) 上顎洞自然口洗浄法	237
2) 上顎洞穿刺法	237
3) 前頭洞洗浄法	237
4) 蝶形骨洞洗浄法	237
5) 徹照法	237
6) 副鼻腔排泄機能検査法	237

第6章 鼻のX線検査法	237
1) 顔面正位撮影法(後頭前頭撮影法)	237
2) 前頭洞撮影法(後頭おとがい(頤) 撮影法 または 半軸位撮影法, Waters 法)	239
3) 蝶形骨洞撮影法(頭頂おとがい(頤) 撮影法 または 軸位撮影法)	241
4) 顔面側位撮影法(両側頭撮影法)	241
5) 顔面斜位撮影法(Rhese 法)	241
6) その他の方法	241

第7章 鼻疾患の治療	248
1) 薬物療法	248
2) 吸引	248
3) 鼻洗浄	249
4) 塗布	249
5) 噴霧法	249
6) 点鼻法	249
7) 霧滴吸入法	249
8) Proetz 置換法	251
9) 上顎洞穿刺	251

各 論

第1章 外鼻 および 鼻前庭疾患	252
1. 外鼻の外傷	252
1) 斜鼻	252
2) 鞍鼻	252
2. 外鼻の奇形	254
1) 複鼻	254

2) 鞍鼻	254
3) 後鼻孔閉鎖症	256
3. 外鼻の皮膚疾患	256
1) 鼻入口部湿疹	256
2) 鼻癬	256
3) 痤瘡 または 酒渣鼻	256

4. 前鼻炎(前鼻乾燥症)	256	1. 副鼻腔異物	289
5. 外鼻の腫瘍	257	2. 慢性副鼻腔炎	289
第2章 鼻中隔疾患	258	1) 名 称	289
1. 外 傷	258	2) 成 因	289
2. 炎 症	258	3) 病 理	292
1) 鼻中隔膿瘍	258	4) 症状と診断	295
2) 鼻中隔潰瘍	258	a) 慢性上顎洞炎	297
3) 鼻中隔穿孔	258	b) 慢性篩骨洞炎	301
3. 鼻中隔彎曲症	259	c) 慢性前頭洞炎	301
〔付〕 外傷性鼻中隔彎曲症(職業性 鼻中隔彎曲症)	262	d) 慢性蝶形骨洞炎	302
第3章 固有鼻腔の疾患	262	5) 慢性副鼻腔炎の予後	302
1. 固有鼻腔の異物	262	6) 合併症	302
〔付〕 鼻 石	263	7) 治 療	305
2. 急性感染症	263	3. 小児副鼻腔炎	311
1) 麻 疹	263	4. 初生児上顎洞炎	312
2) 猩紅熱	263	5. 歯性上顎洞炎	313
3) 腸チフス	263	6. 鼻茸(はなたけ)	313
4) 流行性感冒	263	7. 副鼻腔粘液囊胞(ムコツェーレ), 膿囊胞(ピオツェーレ)	317
3. 鼻出血	263	8. 鼻・副鼻腔疾患による頭痛とその他 の頭痛, 神経痛	320
4. 急性鼻炎	267	第5章 顔面骨折	323
5. 慢性鼻炎	269	1. 下顎骨折	323
6. いわゆるアレルギー性鼻炎, 鼻アレルギー	273	2. 上顎骨折	324
〔付〕 薬物性鼻炎	280	3. 頬骨骨折	325
7. 萎縮性鼻炎	280	4. 鼻骨折	325
8. 特殊性炎症	284	5. 顔面骨折の治療	325
1) 鼻結核	284	第6章 鼻の腫瘍	327
2) 鼻梅毒	284	1. 良性腫瘍	327
3) 鼻ジフテリア	284	1) 上皮性腫瘍	327
9. 鼻性神経症	284	2) 非上皮性腫瘍	331
10. いわゆる進行性壊疽性鼻炎	285	3) 神経組織の腫瘍	333
1) 細網細胞肉腫	285	2. 悪性腫瘍	333
2) 膠原病, ウェゲナー肉芽腫症	286	1) 肉 腫	333
3) 悪性肉芽腫	288	2) 癌 腫	333
第4章 副鼻腔疾患	289		

口腔・咽頭科学

総 論

第 1 章 口腔・咽頭(舌・扁桃・甲状腺

をふくむ)の発生と異常 . . . 345

- 1) 舌の発生 346
- 2) 扁桃の発生 346
- 3) 甲状腺の発生 346

第 2 章 口腔・咽頭の解剖 346

I. 口腔の解剖 346

1. 口 腔 346
2. 口 蓋 347
3. 舌 348
4. 唾液腺 349
5. 咀嚼筋 351
6. 口腔の血管, リンパ管 351
7. 口腔の神経 351

II. 咽頭の解剖 352

1. 上咽頭 または 鼻咽頭(腔) 352
2. 中咽頭 または 口部咽頭 353
3. 下咽頭 または 喉頭部咽頭 353

第 3 章 口腔・咽頭の生理 360

I. 口腔の生理 360

1. 咀嚼 および 口腔消化 360
2. 唾液の分泌 360
- 〔付〕 唾液腺内分泌作用 361

3. 味 覚 361

4. 語音構成 362

5. 呼 吸 363

II. 咽頭の生理 363

1. 呼吸作用 363

2. 嚥下作用 363

3. 共鳴作用 365

4. 扁桃の生理 365

- 1) 感染防禦説と免疫機能説 366
- 2) 消化機能 または 酵素作用 367
- 3) 内分泌説 367
- 4) ビタミンとの関係 367

第 4 章 口腔・咽頭の検査法 368

1. 口腔検査法 368

2. 咽頭検査法 371

- 1) 中咽頭検査法 371
- 2) 上咽頭検査法 371
- 3) 下咽頭検査法 372

第 5 章 口腔・咽頭疾患の一般症状 . . . 372

1. 一般症状 372

2. 局所症状 373

- 1) 血液成分の変化 373
- 2) 知覚 および 反射の障害 373
- 3) 運動障害と嚥下障害 374
- 4) 呼吸障害(閉塞性呼吸困難) 375
- 5) 口 臭 375
- 6) 聴器の障害 375
- 7) 発音 および 言語障害 375

第 6 章 口腔・咽頭疾患の治療 と

ショックの救急処置 375

1. 口腔・咽頭疾患の治療 375

- 1) 全身療法および予防 375
- 2) 局所療法 376

2. ショック症状と救急処置 376

- 1) 症 状 376
- 2) 救急処置 377

各 論

第 1 章 口腔疾患 378

1. 口腔の奇形 379

- 1) 唇裂 および 口蓋裂 379

2) 兔唇, 口蓋裂以外の口腔奇形 382

2. 口腔の外傷 383

- 1) 機械的外傷 383

2) 火傷 および 腐蝕	383
3. 口腔の異物	383
4. 口腔の炎症	384
1) 口内炎	384
2) 歯肉炎	389
3) 舌 炎	390
4) 口底炎	391
5. 口腔における中毒 および ビタミン欠乏症	393
1) 中 毒	393
2) ビタミン欠乏	393
6. 口腔腫瘍	394
1) 口唇の腫瘍	394
2) 歯肉の腫瘍	395
3) 口腔底の腫瘍	395
4) 歯牙と関係ある腫瘍	396
5) 舌の腫瘍	397
6) 口蓋の腫瘍	399
7. 顎骨疾患	402
1) 顎骨骨折	402
2) 顎関節脱臼	402
3) 顎骨骨膜炎 および 骨髓炎	402

第 2 章 咽頭炎 403

1. 急性咽頭炎	403
2. 慢性咽頭炎	403
1) 慢性単純性咽頭炎	403
2) 慢性顆粒性(濾胞性)咽頭炎	404
3) 慢性咽頭側索炎	404
4) 慢性萎縮性(乾燥性)咽頭炎	401
3. 咽後膿瘍	404
4. 副咽頭間隙膿瘍	405
5. 咽頭特殊炎	405
1) 咽頭結核	405
2) 咽頭狼瘡	406
3) 咽頭梅毒	406
4) 咽頭癩	406
5) 咽頭ジフテリア	407

第 3 章 咽頭の神経障害 408

1. 咽頭の感覚障害	408
1) 感覚麻痺 および 感覚鈍麻	408
2) 感覚過敏 および 痛覚過敏	408

3) 感覚異常	408
2. 咽頭の運動障害	409
1) 麻痺性障害	409
2) 痙攣性障害	410

第 4 章 咽頭の腫瘍 410

1. 上咽頭の腫瘍	410
1) 良性腫瘍	410
2) 悪性腫瘍	413
2. 中咽頭の腫瘍	415
1) 良性腫瘍	415
2) 悪性腫瘍	415
3. 下咽頭の腫瘍	417
1) 良性腫瘍	417
2) 悪性腫瘍	417

第 5 章 扁桃疾患 418

1. 扁桃の急性疾患	418
1) 急性口蓋扁桃炎	418
2) 急性咽頭側索炎	420
3) 急性咽頭扁桃炎	421
4) 急性舌根扁桃炎	421
5) 扁桃周囲炎 および 扁桃周囲膿瘍	421
6) プラウト・ワンサン・アングナ	423
7) 猩紅熱性アングナ	424
8) 猩紅熱以外の急性感染性疾患に伴う アングナ	424
9) ヘルペス	425
10) 血液疾患に由来する扁桃疾患	425
a) 感染性単核細胞症	425
b) 白血病	425
c) 無顆粒細胞性アングナ	426
2. 扁桃の慢性疾患	427
1) 口蓋扁桃肥大および慢性口蓋扁桃炎	427
2) 他の扁桃の肥大 および 慢性炎症	430
a) 腺様増殖症, アデノイド	430
〔付〕 ソーンワルト病	432
b) 耳管扁桃肥大	432
c) 舌扁桃肥大 および 慢性舌扁桃炎	433
〔付〕 舌根部静脈瘤	433
d) 慢性咽頭側索炎	433
3) 扁桃の結核症	434

4) 扁桃梅毒	434
5) 扁桃放線菌症	435
6) その他口蓋扁桃にまれにみられる 慢性炎症	436
7) 扁桃と病巣感染	436
3. 扁桃の腫瘍	438
1) 良性腫瘍	438
2) 悪性腫瘍	439
4. その他の扁桃疾患	442
1) 咽頭角化症	442
2) 側頸癭	442
3) 扁桃の異物	443
4) 扁桃内の骨 および 軟骨	443
5) 異常過長茎状突起症	443
5. 口蓋扁桃摘出術 ならびに アデノイド切除術	443
1) 口蓋扁桃摘出術の適応	443
2) アデノイド切除術の適応	444
3) 口蓋扁桃摘出術 および アデノイド切除術の禁忌	445
4) 口蓋扁桃摘出術と急性灰白髄炎との 関連性について	445
5) 口蓋扁桃摘出術, 口蓋扁桃切除術 および アデノイド切除術	445
6) 口蓋扁桃摘出術 および	

アデノイド切除術の合併症	449
--------------	-----

第 6 章 唾液腺の疾患 449

1. 分泌異常	450
2. 唾液腺の炎症	450
1) 流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	450
2) 急性化膿性耳下腺炎	450
3) 急性舌下唾液腺炎, 急性顎下唾液腺炎	451
4) 慢性唾液腺炎	451
〔付〕 ザルコイドーシス(類肉腫症)	451
5) ミクリッツ病	451
6) セーグレン病	452
7) 唾液瘻	452
8) 唾 石	452
3. 唾液腺の腫瘍	454
1) 良性腫瘍	454
a) 支持組織性腫瘍	454
b) 上皮性腫瘍	455
2) 悪性腫瘍	457
a) 支持組織性腫瘍	457
b) 上皮性腫瘍	457

第 7 章 頸部の腫瘤 458

1. 頸部リンパ節疾患	458
2. 先天性頸癭 および 頸嚢胞	461

喉 頭 科 学

総 論

第 1 章 喉頭の発生 465

第 2 章 喉頭の解剖 466

1. 喉頭の軟骨	466
2. 喉頭の筋肉	467
1) 外喉頭筋	467
2) 内喉頭筋	467
〔付〕 輪状披裂関節の構造 と 披裂軟骨の運動	469
3. 喉頭腔	470
1) 声門上腔	470
2) 声門領域	470
3) 声門下腔	470

4. 喉頭の神経 470

1) 上喉頭神経	471
2) 下喉頭神経	471

5. 喉頭の血管 473

6. 喉頭のリンパ管 473

第 3 章 喉頭の生理 474

1. 臨床生理学 喉頭の主要機能 474

1) 呼吸作用	474
2) 下気道の保護	474
3) 発声作用	474

2. 声帯の振動 476

3. 声の高低 477

4. 声の強さ	478
5. 声の種類・声区	478
6. 声の調節作用	478
〔付〕 声帯の振動機構に関する諸説	478
第4章 喉頭疾患の一般症状	479
1. 音声障害	479
1) 強さ(大きさ)の障害	479
2) 音質の障害	479
2. 呼吸障害	480
3. 分泌異常, 喀痰(たん)	482
4. 疼痛	482
5. 知覚障害	482
6. 運動障害	482
第5章 喉頭の検査法	482
1. 間接喉頭鏡検査法	483

2. 直接喉頭鏡検査法	486
3. ストロボ鏡検査法	490
4. 喉頭X線検査法	490
1) 単純撮影法	490
2) 喉頭造影検査法	495
3) 喉頭断層撮影法	496
4) 喉頭X線映画検査法	496

第6章 喉頭疾患の治療	496
1. 全身療法	496
2. 局所療法	496
1) 置法	496
2) 喉頭注入法	497
3) 喉頭噴霧法	497
4) 喉頭塗布	497
5) 吸入法	497
6) 霧滴吸入法	497

各 論

第1章 喉頭の先天性奇形 および 狭窄	498
1. 先天性奇形	498
1) 先天性喉頭横隔膜症	498
2) 先天性喉頭喘鳴	498
2. 喉頭狭窄	499
1) 急性喉頭狭窄	499
2) 慢性喉頭狭窄	499
第2章 喉頭外傷 および 火傷	500
第3章 喉頭異物	502
第4章 喉頭の炎症	503
1. 急性喉頭炎	503
2. 急性声門下喉頭炎(仮性クループ)	504
〔付〕 アレルギー性喉頭炎	504
3. 急性蜂巣織炎性喉頭炎	505
4. 慢性喉頭炎	505
5. 慢性肥厚性喉頭炎	506
1) 喉頭ポリープあるいは慢性ポリープ性声帯炎	506

〔付〕 ポリープ様声帯(ポリープ様変性)	507
2) 謠人結節	507
3) 慢性声門下喉頭炎	507
4) 喉頭室粘膜脱出症	508
5) 喉頭硬皮症	508
6) 喉頭角化症	508
7) ロイコプラキア, 白斑(板)症	508
6. 慢性萎縮性喉頭炎	510
第5章 喉頭の急性感染	510
1. 喉頭ジフテリア	510
2. 流行性感冒	511
第6章 喉頭の慢性感染性疾患	511
1. 喉頭結核	511
2. 喉頭狼瘡	512
3. 喉頭梅毒	513
第7章 喉頭の運動・知覚障害	514
I. 喉頭の運動障害	514
1. 喉頭痙攣	514

目 次

1) 小児の声門痙攣症	514
2) 成人の声門痙攣症	514
2. 喉頭運動麻痺	515
1) 筋性麻痺	515
2) 神経性麻痺	516
a) 大脳性麻痺	516
b) 延髄性麻痺	516
c) 末梢性麻痺	516
反回神経麻痺	516
(1) 神経の損傷	516
(2) 神経の圧迫 または 浸潤	516
(3) 急性感染症の合併症 ならびに 薬物による中毒性神経炎	516
(4) 原因不明のもの	517
i) 完全反回神経麻痺	517
ii) 部分的反回神経麻痺	520
iii) 混合性喉頭麻痺	524
II. 喉頭の知覚障害	526
1. 知覚過敏症	526

2. 知覚鈍麻	526
3. 知覚異常	526

第 8 章 喉頭神経症

1. 感覚性神経症	527
2. 運動性神経症	527
1) 痙攣性発声障害	527
2) ヒステリー性失声症	527

第 9 章 喉頭の腫瘍

I. 良性腫瘍	528
1. 上皮性腫瘍	528
2. 非上皮性腫瘍	530
3. アミロイド腫瘍	530
4. 神経組織の腫瘍	531
II. 悪性腫瘍	531
1. 喉頭癌	531
2. 喉頭肉腫	552

気管・食道科学

総 論

第 1 章 気管、気管支の発生

第 2 章 気管・食道の解剖

1. 気管・気管支の解剖	555
1) 気管と周囲との関係	556
2) 血管 および 神経	556
3) 気管・気管支リンパ節	556
4) 気管・気管支の組織	557
5) 気管支の分岐 および 肺区域と気管・気管支直達鏡像	557
2. 食道の解剖	560
1) 食道と その狭窄部	560
2) 食道の走向	562
3) 食道の組織	562
3. 縦 隔	563

第 3 章 気管・気管支 および 食道の生理

1. 気管・気管支の生理	563
--------------	-----

2. 食道の生理

第 4 章 気管・気管支 および 食道の

検査法

1. 内視鏡検査法	565
1) 内視鏡検査の設備と器具	565
2) open tube 式 (硬性) 気管・気管支鏡 挿入法	567
3) 気管・気管支の検査と所見	567
4) 食道鏡検査法	569
5) 食道の正常 および 病的所見 〔付〕 縦隔鏡検査法	570
2. 気管支 および 食道の X 線検査法	570
1) 気管支の X 線検査法	570
2) 食道の X 線検査法	570

第 5 章 気管切開術

〔付〕 気管カニューレ (套管) 抜去困難症	574
------------------------	-----

各 論

第1章 気管・気管支の疾患 576

1. 気管・気管支の炎症 576
 - 1) 急性気管・気管支炎 576
 - 2) 慢性気管・気管支炎 577
2. 気管・気管支の急性感染症 578
 - 1) 気管・気管支ジフテリア 578
 - 2) 気管・気管支の結核 578
3. 気管・気管支の狭窄 579
4. 気管・気管支の腫瘍 579
 - 1) 腺腫 579
 - 2) 気管・気管支癌 579
5. 喉頭・気管・気管支異物 581

第2章 食道疾患 586

1. 食道の奇形 586
 - 1) 先天的奇形 586
 - 2) 食道憩室 586
2. 食道狭窄 589

3. 食道外傷 589
4. 腐蝕性食道炎と瘢痕性食道狭窄 589
5. 食道の炎症 591
 - 1) 急性炎症 591
 - 2) 慢性炎症 591
6. 食道周囲炎 および 縦隔洞炎 591
7. 食道潰瘍 592
8. 食道の腫瘍 592
 - 1) 良性腫瘍 592
 - 2) 悪性腫瘍 593
9. 食道の神経性疾患 595
 - 1) 食道麻痺 596
 - 2) 食道痙攣 596
 - 3) 食道・喉頭神経症 596
 - 4) プラマー・ビンソン症候群 597
 - 5) 噴門無弛緩症あるいは噴門痙攣 597
10. 食道異物 598

音声・言語科学

総 論

音声・言語障害の医学 603

第1章 音声医学 603

1. 音声の生理 603
 - 1) 声域 604
 - 2) 声種 あるいは 声位 605
 - 3) 声区 605
 - 4) 起声, 声立て 606
 - 5) 発声的零点 606
 - 6) 発声と呼吸 606
2. 音声障害の症状 607
 - 1) 音色の病的変化 607
 - 2) 高さの病的変化 607
 - 3) 強さの病的変化 607
3. 音声障害の診断 および 検査法 608
 - 1) 問診 608
 - 2) 喉頭, 付属管腔の検査 608
 - 3) 音声の検査 603

- 4) 呼吸機能検査 608
- 5) 特殊検査 609

第2章 言語医学 609

1. 発語(言語の生理) 609
 - 1) 構音 609
 - 2) 母音 610
 - 3) 子音 610
 - 4) 言語の発達 612
 - 5) 言語中枢 および 神経支配 614
2. 言語障害の症状 618
3. 言語障害の診断 および 検査法 618
 - 1) 問診 618
 - 2) 現病歴 618
 - 3) 構音器官の検査 618
 - 4) 神経学的検査 618
 - 5) 言語の検査 618
 - 6) その他の検査 619